

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年9月15日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所 属 部 局 アフリカ地域研究資料センター

職 名 センター長／教授

氏 名 梶 茂 樹

助 成 の 種 類	平成27年度・研究成果公開支援・国際会議開催助成			
事 業 内 容	第8回世界言語学会議(8th World Congress of African Linguistics)			
開 催 期 間	平成27年8月20日 ～ 平成27年8月24日			
開 催 場 所	京都大学百周年時計台記念館および稲盛財団記念館			
参 加 者	総 数 182名	内 訳 参加登録者数:海外127名、国内35名 スタッフ数:20人(研究発表者を兼ねる者を除く) 発表件数:全体講演4件、一般・ワークショップ計144件		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(プログラム)			
会 計 報 告	事業に要した経費総額	5,447,988 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 公益財団法人京都文化コンベンションビューロー「中規模MICE開催支援助成金」「京都らしいMICE開催支援補助制度」、各研究者科研費、参加費		
	経費の内訳と助成金の使途について			
		費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
		旅費・滞在費	2,473,476	
		懇親会費	¥ 881,400	
		会場費	¥ 673,920	¥ 673,920
		人件費	¥ 445,160	
		製本印刷費		
		コピー機レンタル(搬入・搬出・出力)	¥ 151,101	¥ 151,101
		立看板	¥ 19,440	
		トートバッグ(本体・印刷)	¥ 175,500	¥ 174,979
	会議費	¥ 289,201		
	アトラクション費	¥ 166,950		
	予備費(文房具、コピー用紙など)	¥ 81,555		
	諸雑費	¥ 65,789		
	通信費	¥ 24,496		
		¥ 5,447,988	¥ 1,000,000	
当財団の助成について	利用者のニーズに応じて柔軟に対応していただいているという印象であり、また、電話での問い合わせにも快く応じてくださり、感謝いたしております。 一点ご提案ですが、外国人参加者・関係者に貴財団の事業を周知する上で、個別助成事業の英語での正式名称があればよいと思います。ご検討ください。			

第8回世界アフリカ言語学会議 (8th World Congress of African Linguistics) が、2015年8月20日から24日の日程で、京都大学百周年時計台記念館と稲盛財団記念館大会議室にて開催された。海外からは、アフリカをはじめ、北中南米、西東北欧、東アジアなど28カ国の大学・研究機関等から計127名、日本からは35名が参加した。海外参加者はほぼ全員が発表者であり、日本人参加者のうち発表者は15名であった。なお、アフリカ大陸からは南アフリカ、ボツワナ、タンザニア、ケニア、カメルーン、チャド、ナイジェリア、ガーナ、コートジボワール、ベニン、モロッコからの参加者があった。

8月20日に pre-Wocal としてコイサン諸語のワークショップが開催されたのに続き、翌8月21日の午前には開会式典が百周年記念ホールで挙行された。WOCAL8 実行委員会委員長である梶茂樹 アフリカ地域研究資料センター教授・センター長による開会の辞に続いて、Akinbiyi Akinlabi WOCAL 議長挨拶、稲葉カヨ 京都大学理事挨拶、Matthias Brenzinger WOCAL 事務局長挨拶があり、式典の最後には WOCAL 運営委員であった故 Pius Tamanji 教授への追悼の辞が Gratien Atindogbé 氏から読み上げられた。

8月21日から24日の各午前中には Plenary Talk として4件5名による全体講演が行われた。

- 21日：柴谷方良教授 (ライス大学) 「Rethinking Relative Clause」
- 22日：松沢哲郎教授 (京都大学) 「Evolutionary Origin of Human Language Viewed from the Study of Chimpanzees」
- 23日 (Part 1) Yédè Adama Sanogo 氏 (コートジボワール Society Without Barriers 代表) 「Promoting Deaf Communities' Linguistic Rights in West Africa: What Role for Deaf Persons in Sign Language Research Field?」
(Part 2) 亀井伸孝 (愛知県立大学) 「A comparative study on the Empowerment of Deaf Communities as Linguistic Minorities: The cases of West and Central Africa in the Post-Foster Era」
- 24日：Tucker Childs 教授 (ポートランド州立大学) 「What's Really Areal?」

各日とも Plenary Talk 終了後は個別パラレルセッションに移り、5つの会場で、音声学・音韻論、形態論、統語論、意味論、類型論、社会言語学、語用論、ピジン・クレオール、言語接触、歴史言語学、手話など、アフリカ言語学に関するあらゆる分野について、最新の研究成果の発表が行われた。

また、WOCAL8 では、個別オーガナイザーによるある分野に特化した長時間の特別セッション枠を「ワークショップ」として設けた。23日(日)を中心に開催されたこれらワークショップのいずれにおいても白熱した議論が交わされた。各ワークショップのテーマは以下のとおり：

- 「Current Trends in Khoisan Linguistics」(本会議開会前日の8月20日に稲盛財団記念館にて開催)
- 「African Ideophones and Their Contribution to Linguistics」
- 「Areal Phenomena in Northern Sub-Saharan Africa」

- 「Sign Language and Deaf Education」
- 「From Home to Home: African Urban Youth Language in the Diaspora」
- 「Event Integration Patterns in African Languages」

各研究発表を通して質の高い研究の成果や動向を知ることができたことは当然のこととして、WOCAL 8 の最大の成果は、全世界に散らばるアフリカ言語学研究者が一堂に会する場とすることに成功したことにある。会場のあちこちで、アフリカ言語学の先端的研究情報が参加者間で face-to-face で交わされ、また、新たな研究展開についての見通しについて意見が交換された。

参加者の約 3 割がアフリカ人（欧米などの研究機関に所属する者も含む）であり、これは「アフリカ人主導のもとでのアフリカ言語学研究を推進する」という WOCAL 設立の理念を具現化したものといえる。

とりわけ、若手・中堅研究者の参加者数が多かったことが、会議全体を活気のあるものにした。例えば、ワークショップの多くはこうした若い研究者のオーガナイズによるものであった。なお、WOCAL 8 では学生やポストクに対して日本滞在中の滞在費を支援するプログラムを設けていたが、これにより多くの学生・院生・ポストクの参加を促すことができた。いずれも熱意に満ちた若き研究者であり、新たな研究世代が構成されつつあることをうかがわせた。

WOCAL は 3 年に一度、間にアフリカを挟みながら開催されているが、これまでの開催地はアフリカ以外では主としてヨーロッパであった（前第 7 回大会はカメルーン・ブエア大学、第 6 回大会はドイツ・ケルン大学）。本大会はアジアで初めて開催された WOCAL 大会として特筆される。アフリカ、ヨーロッパから遠く離れた地でありながらこれほど多くの参加者を集めることができたのは、歴史と文化の学術都市としての京都の魅力によるところも大きい。

我が国におけるアフリカ研究、言語研究のレベルの高さについては、各個別発表や Plenary Talk などを通して実感していただけたと思う。

なお、次回 WOCAL 9（2018 年）はモロッコ国ラバトにあるムハンマド 5 世大学アグダル校での開催が決定している。

